



ミュンヘン「白バラ」事件

山下公子 (早稲田大学教授) Text by Kimiko Yamashita

左からハンス、ゾフィー、クリストフ

ドイツ、バイエルン州の州都ミュンヘンは、今や観光客に人気の、のんびりした都会だが、のどかではない過去も抱えている。

ナチ・ドイツ時代、ミュンヘンは「運動の首都」と呼ばれていた。ヒトラーが「ナチ」党首として政治活動を開始し、1923年、ムソリーニの「ローマ進軍」に倣って「ベルリン進軍」の上、共和国政府を倒そうとクーデタを仕掛け、見事に失敗した舞台がミュンヘンだったからである。

しかし、1943年2月、「運動の首都」では起こり得べからざることが起こっていた。ミュンヘン大学の学生が当局に反発して騒乱を起こし、非常事態宣言が出される騒ぎになっていたのだ。

「運動」当初から学生組織で勢力拡大を果たし、常に「若者の党」を標榜していたナチ党政権にとって、あってはならない事態である。騒ぎの発端は党幹部の軽率な内容の演説だったので、演説に関しては謝罪するなど、当局は学生の鎮撫に努めた。

騒ぎのほとぼりも冷めぬ2月18日、大学でとんでもない事件が起こる。2人の男女学生が大学構内でヒトラーを厳しく批判するピラを、大量に撒いたのだ。2人の背後には英米軍も、ソ連や共産党の動きもなさそうだった。当局にとっては最悪である。血統上問題なく、社会主義者でも労働者（プロレタリアート）でもない「立派なドイツ人青年男女」が反ヒトラー蜂起を呼びかけるとは。

捜査開始直後、このピラの作者は前年夏から、小規模ながら、ナチ当局への抵抗を呼びかける文書を度々出していたことが分かった。呼びかけの作者は「白バラ」と名乗っており、警察には既に「白バラ」のファイルがあったのだ。

逮捕されたショル兄妹と、兄ハンスが持っていた反ヒトラー的草稿の筆者、クリストフ・ブロープストの3人は、4日後、人民法廷長官フライスラーがベルリンから空路出張して主宰した裁判で死刑判決を受け、即日処刑された。

学生騒乱と「白バラ」のピラに直接の関連はなかったが、即決裁判に近い3人の処刑は、当局にこれ以上逆らえよこうなるという、強力な恫喝の効果を狙ったものと考えられる。

捜査、逮捕、尋問は続き、4月に再びフライスラー指揮下で被告11人に対する裁判が行われた。ここで、アレクサンダー・シュモレル、ヴィリー・グラーフの2人の大学生と、ミュンヘン大学員外教授クルト・フーバーに死刑判決が下され、「白バラ」事件の主要審理は終了した。

以後、1945年5月のドイツ無条件降伏まで、大学生であると否とを問わず、ミュンヘン、ドイツ、そして全てのヨーロッパ在住の人たちは、前線で、あるいは銃後で、激化する戦争の渦に巻き込まれ、多く理不尽に命を落とすことになる。

第660回 定期演奏会 5月26日(土) 6:00p.m. サントリーホール

指揮：飯森範親 ソプラノ：角田祐子 バリトン：クリスティアン・ミードル

ヘンツェ：交響的侵略～マラ톤の墓の上で～

ウド・ツインマーマン：歌劇「白いバラ」(演奏会形式／字幕付／日本初演)